

3) モノクロ表現
 ・ブナの大神の樹肌等、凹凸感があり、ゴワゴワした感じのディテールは、ぜひモノクロで観たい。セピア調も面白い。
 ・水量のある滝の表情をモノクロで観たい。

4) 季節感
 ・(雪渓がアーチとして残っている作品について) 1枚の画面に夏と冬が同居しているような写真は、日本の季節が錯乱するようで、目を引く写真になる。これは大事な要素で、風景写真における決定的瞬間と言える。

5) 花を人物に見立て
 ・グリアやユリなど大きな花を人物に見立ててポートレート風に撮るのも面白い。

5. その他

・人間は徐々に味の濃いものを好むようになり、エスカレートする傾向にある。滝の表現などで、一步引いてから、いろんなパターンで撮ってみると良い。
 ・ブナの大神は画面に納まりきっていないところに、力強さが表れている。撮影している方が食われそう。
 ・手前の大きな木と背後の小さな木々を入れた写真は、親分を迎える子分たちのように擬人化できておもしろい。
【総評】
 ・皆さんのような作品が「アサヒカメラ」の月例コンテストに多数応募されれば、「アサヒカメラ」の「カラスライド部門中止」の判断はなかったと思う。

・全員が「現代の写真」をとらえており、「現代性」「同時代性」を写しこんでいることを強く感じた。「風景写真」というものが、時代をとらえているという認識を持った。
 ・来年中に、「アサヒカメラ」誌上で大判写真コンテストをやるので、是非応募してほしい。
 ・佐々木広人編集長の講評は、敬老精神のためか甘口トークが進められながらも、じわりじわりと厳しさが増し、これからの写真のあるべき姿について、我々の取り組み姿勢について示唆をいただいたと感じるものでした。
 さて皆さん、是非「アサヒカメラ」のコンテストに応募しましょう!!! (板尾 浩 記)

上高地撮影会報告 2014.10.25~26

今回の撮影会は、今迄にない好天に恵まれた撮影会でした。男性20名、女性3名の23名が参加されました。遠く下関より山本さんが、大阪からは中西さんが来られました。その他の方は、東京を中心とした関東各地からの参加でした。



土曜日の午後1時30分に集合して頂きまして、全員が揃ったところで集合写真を撮り撮影会を始めました。皆さんは、河童橋を中心にご自分の決めたポイントを探し撮影をされていたようです。午後4時前後には、宿泊所である「五千尺ロッジ」にチェックインしました。その後は風呂などに入ってゆっくりとくつろいで頂くことと思います。

午後6時より、待ちに待った宴会が始まりました。食事はバイキング形式で、料理の種類・量も沢山あったようです。飲み物も皆さんに満足して戴けた様子でした。話題は、やはり撮影についての話。楽しい時間もあっという間に過ぎてしまいました。翌日の支度などあり、それ

ぞれの部屋に戻られました。
 翌日、午前5時過ぎにはロビーに集まり、ロッジを中心にそれぞれのポイントに入って撮影をされたようでした。午前6時過ぎには朝日が穂高連峰の山頂部分を照らし始めました。上空には雲が見当たりませんでした。皆さんはきっと素敵なショットを収めたことと思います。朝の撮影を終えて皆さんが三々五々ロッジに戻り、朝食を食べながら今後の撮影予定などについて相談されていました。
 その後チェックアウトになりましたが、明神池、岳沢温泉、小梨平、田代池、梓川沿いなど、気に入ったポイントを探し撮影されていた様子でした。午前10時過ぎに解散ということで、ロッジを出発しました。その後の皆さん方の行動につきましては把握できませんでしたが、今回の撮影会は天候に恵まれた撮影会だったので、恐らく満足して戴けたことと思います。帰路は、行楽シーズンの日曜日だった為交通渋滞に遭遇された方も多かったのではないかと思います。大変お疲れ様でした。
 ―参加した皆さんの声をご紹介します―
 ①素晴らしい時期に來られて撮影できたのは感動的。でも朝晩とても寒かった。
 ②自分一人では来られないので、こういう機会を作って貰えるのは有難い。
 ③上高地はこれまで溜沢への通過点。ここで撮った事がなかったのが良かった。
 ④河童橋のたもとでリンホフを操作中に、外国

基礎勉強会報告 2014.11.15

穏やかに晴れた土曜日、いつもの新宿御苑に埼玉から男性1名、木更津から女性1名と会員7名が参加。男性はアオリの勉強をしたとのことでしたが、大判カメラは初めてのことで基本的な構造、取り扱い方の説明の後、田中秋秀さんがインストラクターとなり、近くの建物などを被写体にして熱心に指導。女性は前に勉強会に参加されたことがあったので、大判カメラは初めてのこと。取り扱い方の説明等インストラクター

は高島正志さん。
 お二人共、大判カメラにはたいへん興味をお持ちで、いろいろ質問をされていました。今回は初めてということもあり、基本的な取り扱いの説明等でしたが、今後も勉強会に参加し大判カメラの楽しさを知って、リンホフクラブに入学してほしいと思いました。途中から、別件で来苑されていた石田研二さんも加わり、会員との情報交換等と気さくの勉強会となりました。(酒巻 澄江 記)



人が傍に来て「写真を撮らせてくれ」と言われ、気がなって手元が狂ってしまった。
 ⑤上高地は観光地なので作品作りが出来るとは正直思っていないが、色々探せばあるかもしれない。
 ⑥自分より年長の方が、重たい荷を背負って元気に歩き回っている姿を見てると元気が貰える。
 ⑦普段なかなか来られない所に来られて楽しかった。
 ⑧撮影会への参加は初めて。夜空も大変奇で良かった。
 ⑨食事後に参加者のみんなが集まったの雑談会があったといい。
 ⑩これまで富士山ばかり撮っていたので上高地は初めて。樹々が一杯ある所はどこへ行ってもいい。勉強になる。
 ⑪旅館の食事でバイキングは、食べる量を自分で調整できるのでいい。料理もおいしかった。飲み放題がいい!
 ⑫8 畳間に4人はちょっと狭い。荷物の置き場が小さかった。(小寺 忠夫 記)



第5回「日本の輝ける風景」展 応募作品選考会終わる

第5回「日本の輝ける風景」展に応募された作品の選考会を10月8日に行いました。選考は写真家の石橋隆美先生。応募者は例年どおり63名(内モノクロームは4名)。一人3〜5枚の応募の中から展示する作品を全体の色合い、季節、被写体、などを勘案しつつ、ピント、構図などをチェックして一人一ポイントづつ選択。次に、次々回の展示会場審査用に提出するポートフォリオ作成の為、(展示作品とは別に)30数点選びました。所用時間は締めて3時間。その後六切サイズのプリントを色校用に作成し、指示どおりにプリントされているかどうか確認。それから全紙大のプリントを作成。全紙でも色校を行って本番用の完成です。色校も石橋先生にお願いしました。お疲れ様でした。乞うご期待です。



東京展：富士フィルムギャラリー新宿
 2015年2月6日(金)〜2月12日(木)
 大阪展：富士フィルムフォトサロン大阪
 2015年4月3日(金)〜4月9日(木)
 京都展：A' BOX GALLERY 1&2
 2015年4月17日(金)〜4月22日(水)

近畿支部だより

①平成26年度第2回役員幹事会が開催されました。
 平成26年度第2回役員幹事会を9月7日(日)午前10時より京都市のエイエムエス小会議室で開催し、次の事項について協議しました。
 1.平成26年度撮影会について
 2.近畿支部写真展の実施について
 3.支部活動の主体性について
 ②平成26年度第2回講評会が開催されました。
 平成26年度第2回講評会を去る9月7日(日)13時より京都市のエイエムエス大会議室で開催しました。講師の藤井小十郎先生より、作品の構図の取り方、トリミングの方法、シャッタースピードの決め方等について指導を受けました。特に、構図については役者(被写体の対象物)が多すぎるとかえってまどめにくなり散逸した作品になってしまうので、役者を少なくする方がいいこともありうるということを、提出された作品を例にとり指導をいただきました。
 ③平成26年度撮影会が開催されました。
 近畿支部の平成26年度の撮影会を11月1日(土)〜2日(日)岐阜県平湯、奥飛騨方面にて開催し、13名が参加しました。



宿の玄関で記念撮影
 雨に輝る奥飛騨
 現地集合・現地解散方式で実施。夕食には飛騨牛の朴葉焼きと地酒に舌鼓をうちながら親睦のひと時をすごしました。雨模様の日でしたが晩秋の奥飛騨方面の風景を楽しむことが出来ました。
 ④第5回 日本リンホフクラブ写真展日程が決まりました
 第5回写真展の近畿地区での開催が決まりました。
 大阪展 期日 平成27年4月3日(金)〜4月9日(木)
 場所 富士フィルムフォトサロン大阪
 京都展 期日 平成27年4月17日(金)〜4月22日(水)
 場所 京都 エイエムエス写真館 A' BOX ギャラリー (向林 輝夫 記)



曾我定昭「幽彩天城の森 妖しく哀しいまでの情念が漂う」
 ■会 期：2015年1月7日(水)〜1月19日(月) 火曜日休館
 ■場 所：リコーイメージングスクエア新宿 (新宿センタービル)
 これまで「天城」一筋に「天城山」「天城」「幽幻」と3冊の写真集を出し、「天城」を極めた曾我定昭さんのフレスコジクレーでプリントされた全倍38点の作品展です。「伊豆天城の森は伝えられる歴史のせいか、美しさと儚さが同居する暗く哀しい情念を感じる。清々しさ、美しさを守る精霊たちと、それを壊そうとする妖しげな気配が常に漂って混在する。そんな心に感じた情景を表現したかった。」何やら石川さゆりの「天城越え」が聞こえてきそうです。

■理事改選のお知らせ 日本リンホフクラブが発足してからはや6年近くが経ちます。来年は、2回目の理事改選の年です。当クラブ規約17条並びに理事選挙規則に従って改選されます。理事の定員は14名です。当クラブの運営に参加し、発展に貢献したいという意欲ある方は是非立候補して下さい。同封の「日本リンホフクラブ理事改選のお知らせ/立候補届け」に基づき立候補に必要な書類を2015年1月31日までに事務局宛送付若しくは持参して下さい。次号会報24号(3月中旬発行予定)に「選挙公報」と「投票用紙」を同封します。2015年4月11日(土)に予定している総会にて新理事が誕生します。
 なお、当クラブの規約、理事選挙規則については、当クラブのホームページ (<http://www.linhof-club.com>) をご覧ください。もしくは、事務局にコピーをご請求下さい。

《例会・基礎勉強会》

例会(勉強会・作品講評会)	3000円	2015年1月17日(土)	10:00~16:00	勉強会/高島正志会員・作品講評/石橋隆美先生
大判カメラ基礎勉強会	無料	2015年2月14日(土)	13:00~16:00	インドア編

■会場：公共会議室利用のため、開催日の一ヶ月前に決定致します。ホームページ等でご確認ください。
 ■お申込方法：事務局まで電話、ファックス、メール等でご連絡ください。参加費は当日徴収致します。

【編集後記】 ネイチャー写真家にとって秋は、新緑の季節と合わせて「書き入れ時」ですが、今年の紅葉は全般的に早く来たようです。収穫は如何でしたか?早いもので今年も1年が過ぎました。現役時代は全く意識していなかった時の過ぎ行く状況がいつも頭を離れません。これまでの作品を写真集として纏めるには、何が足りないか?何を撮れば完成形と言えるか?アサヒカメラ佐々木編集長が言われた「魅せる」写真を、自分のテーマではどう撮るか?難しい課題があるからこそ考え、工夫し、撮影が楽しくなるのでしょう。今年一年皆様には大変お世話になりました。来年も皆様元気歩き回り、素晴らしい作品をモノにして写真集、写真展、コンテストなどで成果を披露されるよう期待しています。また、会報への投稿もお待ちしております。(川太 泰夫)



日本リンホフクラブ会報

Japan Linhof Club (JLC)

VOL.23
 2014年12月25日発行

〒113-0033 東京都文京区本郷3-39-14 株式会社ワイズクリエイティブ内
 TEL 03-5689-2776 FAX 03-5689-2786
 日本リンホフクラブ会報制作委員会(板尾、大川、川太、酒巻、事務局)
<http://www.linhof-club.com> info@linhof-club.com

富士フィルム写真関連のキー・パーソンに話を伺いました

デジカメ隆盛の現在でもフィルムをこよなく愛する当リンホフクラブの会員が、等しく気にしている「フィルムはいつまで存続するのか?」等について、富士フィルムの写真関連キーパーソンに話を伺うことができました。

Q1. 富士フィルムイメージングシステムズ(株)及びフォトイメージング事業部の事業内容をお教え下さい。

富士フィルム(株)は、撮影フィルムや銀塩写真プリントのペーパーなどを製造しているメーカーで、全世界の事業本部(製造と販売)の役割を担っています。その日本国内の販売会社という位置づけが富士フィルムイメージングシステムズ(株)です。撮影フィルムやプリントのマーケティングを行う「フォトイメージング事業部」とデジカメ等を扱う「ファインビッツ事業部」に分かれます。

Q2. デジカメ隆盛の昨今、フィルムの消費量はピーク時と比べてどの程度減少していますか?また、フィルム関連事業は富士フィルムグループ連結売上げの10%を切ったようですが、最盛期はどの程度の割合を占めていたのでしょうか?

当社は、出荷数量を公表していませんので、「フォトマーケット」という写真業界誌に他社さんを含む出荷データ(「一般用フィルム・印画紙の国内出荷(1975~2012)〈ネガカラー、リバーサル、白黒、8mm、インスタントフィルムの合計で面積表示)が掲載されていますので、これを引用させていただきながらお話しさせて頂きます。このデータでは、カラーフィルムの出荷量(面積)は1975年が約470万㎡。ここから年々右肩上がり一直線で伸びていき、ピーク時1997年には何と2,000万㎡弱に達しています。確かに、当社以外にコニカ、KODAK、Agfa、ILFORDなどがあり、フィルムの華やかな時代でした。

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社
 フォトイメージング事業部 部長 島田 知明氏
 同 マネージャー 勝原 潤氏
 同 リーダー 岡部 靖氏
 富士フィルム株式会社
 宣伝部 フジフィルム スクエア 木内 格志氏



島田 知明氏
 量が減少した品種(ポートレート用RAP F、タンクステンタイプのRTP、学術分野の資料用としてRAIII、ネオパン400PRESTO、1600SuperPRESTO、フジカラーPRO160NC、PRO400、REALACE、QL、5x7など)の販売を終了いたしました。お使いになられる数量が減少し、採算がとれなくなった製品を終了することで、まだ供給継続が見込まれるフィルムを残し生産を継続していくという苦渋の覚悟です。
 35mm(6銘柄)、プローニー(7銘柄)、シート(4x5、8x10、6銘柄)が現在のラインナップです。写真館もデジタル化が進みましたが、フィルムならではの表現に拘られるお客様のためにフジカラーPRO160NSを残しています。
 同データのリバーサルフィルム国内出荷量を、ピーク時の1997年と2012年と比較したものが次の表です(2012年シートは推計を加算)。これをご覧になってお分かりの様に、リバーサルフィルム全体の需要(ネガカラーに比べ)少ないとはいえ大幅な減少で、シートに関し

ではピーク時の1%しかありません。申し上げられるのは、製品を提供できるという意味では、弊社は少なくとも今後10年というスパンで見通しを立てているという事です。但し、いくら造ることができても、お使いになられる方がどれだけいらっしゃるにかかっています。また継続出来る品種やサイズは、需要動向で左右されるという事です。

リバーサルフィルムの国内出荷量 (万本 / 万枚・4X5 換算)					
	1997年		2012年		2012年 / 1997年
	実績	ウエイト	実績	ウエイト	
135 (24ex / 36ex)	1,727	39%	100	55%	6/100
120 / 220	1,029	23%	59	32%	6/100
シート	1,691	38%	23	13%	1/100
合計	4,447	100%	182	100%	4/100

デジタル化は激流で、既にコンパクトデジカメすらスマホやタブレットにその座を奪われ始めています。これからどう方向に向かうのか、どういう政策を打ち出していけばフィルムが維持できるのか? 私どもにも大きな悩みがあります。激流の中で銀塩事業を継続させるのにある程度の整理をしたので、今後の市場動向を見極めることが重要と考えています。

Q4. デジカメの性能が飛躍的に向上し、これ以上はということまでできた感じがします。フィルム時代を彷彿させるスタイルのデジカメ (FUJIFILM X-T1、ニコン Df) も登場しています。大中判カメラに手を出す女性もいます。フィルムへの回帰が進んでいるという認識はありますか?

数字の上では、フィルムへの回帰が進んでいるということまでは実感できませんが、撮影の選択肢が増えているだけで、フィルムを使うことが他の人との差別化になってきたという事は言えると思います。スマホでも奇麗な写真が撮れる時代に、自分の作品を作ろうとする若い世代の作家や作家を目指している人達が、フィルムに拘っていると云えます。プロ写真家の中で、フィルムを嫌う人はいませんし、自分の作品撮影ではフィルムを使う人が結構います。例えば、"GELATIN SILVER SESSION" ②に属しているプロ写真家は、自己表現としてフィルムを次の世代へ残していこうという運動をしています。

* ②瀧本幹也、広川泰士、平間 至、藤井保の四氏で2006年にスタートし、その後三好耕三、本城直季、操上和美、水越 武さん等数多くのプロ写真家の参加・賛同を得ています。

Q5. レンブラントの生産をやめたのは、販売の量が生産を維持するのに満たない量まで

減少した為ですが、比較的数量の多いフジプロ WP の多階調と単階調 (2号~4号) の印画紙は残っています。勿論、処理薬品も生産は続けていきます。タングステン球が姿を消しつつあるいま、LED 電球がモノクロの引伸し機に使えるかどうかのテストをし、代用は可能だという結論が出ています。これもモノクロームを大事にしていこう、という姿勢の現れです。

また、現在フィルム・デジカメ兼用でミニラボなどで使用するレーザー露光用の銀塩カラー印画紙はメイン製品ですし、暗室で使う手焼き用のカラー印画紙も提供しています。

Q6. 富士フィルムフォトサロンで写真展を開催できることは、写真家にとって大変名誉なこととして良く知られています。展示申し込みは依然として多いのでしょうか?

依然多いですよ。年間 52 週のうち企画展と正月を除いて 39 週 (二箇所で 78 スペース) ですが、一般には 60~70 スペースを提供しています。二桁まではいきませんが、何倍かの競争率です。ある一定以上のレベルを維持したいので、全て応募で埋めるといってはしていません。応募者の 80% 以上がアマチュアで、その内 40% 程度がフィルム (からの作品) での応募です。毎年同じクラブが写真展を開催することがありますが、これも審査をした結果です。

Q7. 東京 (六本木) の二つのギャラリーの隣、ピンテージカマコーナーの横のスペースで、A.Adams とか田淵行男さん、土門 拳さんの写真が展示されています。多くの優れた写真家の作品を常時見ることができるようになったというのは大変嬉しいことです。

写真歴史博物館に、最近デジカメ紹介とそのデジカメで撮られたプロ写真家の作品を展示するコーナーを作りましたが、写真の展示部分は変更していません。ここでは、土門 拳さんとか木村伊兵衛さんなど歴史的に価値のある写真家の作品を展示しています。

Q8. 写真の持つ一つの側面、記録性という観点からみたら、フィルムが断然優位とみえています。特に、大判フィルム (PET) の保存性とデジタルの記録メディア (の進化) を比較したら明らかでしょう。もっと、フィルムの持つ力をアピールして戴きたいのですが。

通信との親和性を考えたらデジタルが優れているし、デジタルにも良い面があります。ですから、「何故フィルムでなければいけないのか?」と自問自答もしています。プロ写真家の団体公益社団法人日本写真家協会では、アーカイブセンターを設立してフィ



岡部 靖氏 勝原 潤氏 木内 格志氏

ルムの保存を始めています。唯一無二の物と実在するという real な価値は、写真作品市場においても重視されています。また、保存性は 100 年の実績があります。今は不要でも、5 年、10 年或は 20 年後に価値を持つのが写真で、それは、“紙”として残す、“フィルム”として残してあるからこそその価値かと。生身の人として、デジタル・データが果たしてどのように残っていくのか心配です。少なくともプロプリントとしては非残すで頂きたいと思います。モノが持っている real な手応えこそが価値だと。

また、写真をひとに見せたいという欲求は今後も健在でしょう。今流行の SNS で見せるのも一つの形ではありますが、写真展の開催、写真集の作成、コンテストで一等賞を取りたいなど、自分の作品として集大成されるカタチは紙なのではないかと、今でも思います。

—— インタビュー所感 ——

写真は、日本人の生活に無くてはならないものとして根付いています。子どもの誕生に始まり、結婚だ、旅行だ、孫だ、記念日等々日々写真を撮り続けています。写真コンテストは出版社や新聞社にカメラ店、カメラメーカーのみならず、地方自治体が主催するものも含めれば数限りなくあります。写真美術館や写真のギャラリーも東京・大阪等の大会のみならず各地にかなり存在しています。また、各家庭には写真アルバムが何冊もあります。富士フィルムは、フィルム、印画紙、処理薬品の生産・販売にとどまらず、東日本大震災で津波に流されたプリントを再生する様な事もやられました。写真分野における富士フィルムの存在は貴重です。コニカや Agfa が撤退し、KODAK 社が大幅に縮小した中で最後の砦です。本日お聞きした富士フィルム写真関連キー・パーソンの話は、大変頼もしく且つ嬉しい事でした。

「利益を出さずに生産・販売を継続する事は出来ない」というのは、“going concern”としての企業としては当然の事ではあります。でも、需要が先か供給が先か、はちと難しい命題です。フィルム存続の為に私達フィルム愛好家がやる事は、“フィルムを使い続ける、それともたくさん!”と言います。(川太 泰夫)

私のこの一枚 小鷹 一弘 Kazuhiro Kotaka

わたしの最後の一枚?

2001年7月、ワイズが主催する石橋睦美先生の「日本の森ワークショップ 平和田・八甲田」に参加した事がきっかけで、私は 8x10 による「森」の写真撮影を始める事になりました。8x10 を選んだ理由は、真摯に森と向き合い対話を交わす道具として最良のフォーマットであると、このときの撮影を通じて直感的に思うところがあったからです。

以来、2010年10月に行なわれた最後の「日本の森ワークショップ雨飾」までの約10年間に合計28回「日本の森ワークショップ」に参加し、石橋先生の薫陶を受けつつ 1カット 2枚撮りを原則として、ヘルビア 50・プロビア 100F 等で合計約1300枚撮影しました。最初は2本からスタートしたレンズも最終的には、120mm、150mm、190mm、210mm、240mm、270mm、300mm、450mm、600mm、800mm の 10 本にまで必然的に増殖して行きました。タチハラウッドビューカメラと上記のレンズ群、フィルムホルダー 5 枚とこれらを持ち運ぶ背負子、そして諸々の備品等・三脚を合計すると機材の総重量は軽く 20kg を超過します。正に、体力勝負です。

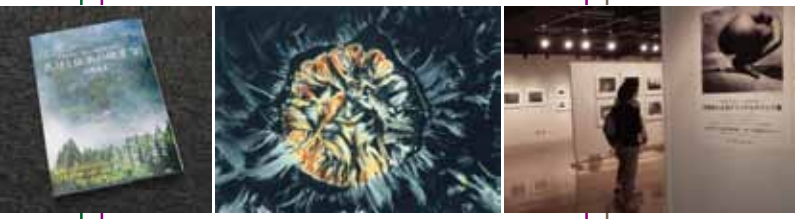
そこまでしてなぜ 8x10 での撮影にこだわったかという、「森との対話の道具」としては勿論の事、構図を決めレンズを選びピントを合わせた時にピントガラスに浮かび上がってくる風景の美しさに魅了されたからです。4x5 でも同じ事が言えると思いますが、画面の面積が 4 倍もある 8x10 の方が圧倒的に迫ってくる印象がより強くなります。もう 1 つの理由は、画面が広い分隅々にまで神経を配る必要が生じ、その為構図やピントの確認作業をより丁寧かつ丹念に行なうようになり、その事が逆によい結果を生むからです。折角 8x10 で撮影するからには、構図を完璧にしてトリミングでプリントできるポジを作る事を至上命題にして撮影に取り組んできました。その為にも 10 本のレンズは不可欠でした。

「日本の森」の撮影で使い残したフィルムで写した最後の 1 枚が、「日光仏岩」の写真です。次の撮影テーマとして選んだ「中央構造線」の撮影では、もはや物理的に 8x10 の出番はなくなり機材 1 式お蔵入りしてす

石橋睦美写真集「民話と伝承の絶景 36」をお薦めします

ネイチャー写真の愛好家が「我が師匠」と呼ぶ写真家石橋睦美さんが、写真と文章を一体化した新しい形の本を「山と溪谷社」(定価 1700 円+税) から出されました。「三年前から民話や伝承の舞台になった土地を訪ね歩いた。その目線で風景を見つめてみると、湿潤な風土が培った日本人の精神性が見えてくる。」……「なにより印象的なのは霊魂の存在である。このことが日本独特の風俗文化を育んだ原点ではないだろうか。」

北は北海道から西は四国までの 36ヶ所が写真と文章とで紹介されています。見開きの写真を見、ネイチャー写真家なら一度は足を運んだであろう場所に、このような「民話や伝承」がある事を知ると、見たことのある風景が俄然違う光景に見えてきます。新しい風景写真の在り方を提示しているのかもしれない。皆さんも是非手にとって写真を眺め、そしてお読み下さい。



に約3年が経ちました。

「日本の森」の撮影で、せっかく努力して写した写真も最終形と考えていた B 全プリントまでに辿り着き、写真展等々で日の目を見たのは残念ながらわずか 40 枚程度に過ぎません。最近、飯塚・井川両氏の写真展(「追想の水景」)に触発されて、プレスコジグレーに活路を見出そうと活動を始めたところですが、8x10 ポジをフラットヘッドスキャナー (GX-X970) でデータ化して、それを Adobe Lightroom 5 で加工し、Photoshop 2014 で保存する作業を徐々に進めています。プリントは新宿にあるエプサイトのプライベートラボを利用してプレスコジグレー (A3 ノビ) に、この 7 月から隔月ごとに 1 回につき 10 枚程度プリントする予定を立てています。プレスコジグレーは、その性質上インクが落ち着くのに数ヶ月かかるので、その結果を見て次に生かす必要があり最終的なプリントの完成まで時間を要します。これから数年かけて、眠ったままの「10 年間の遺産」を、色彩に対して鋭い感性を持つ石橋先生のご指導を再度仰ぎつつ、何とか日の当る場所に送り出したいと考えています。(千葉県佐倉市在住)



勉強会報告 2014.10.18 <<<

写真の「総合誌」月刊「アサヒカメラ」の佐々木広人編集長に「審査の現場から見てくる写真の「現在」一見せる写真から魅せる写真へと題して講演して頂きました。「週に3日くらいは和装で出動している」が、本日は自宅が近いということでジーンズに身を包み自転車から来た 43 歳の「写真界の落語家」編集長です。本日の為にスライドを 50 枚ほど使って「本気出して」作成したパワーポイントを駆使して 2 時間の熱演でした。

1. 敢えてコンテストの話をするのは、「写真は見てナンボ」という事がある。撮って、プリントして見るところまでが写真と言える。「アサヒカメラ」は今年で創刊から 88 年。月例コンテストは少なくとも 50 数年続いている。現在はモノクローム、カラー、組、カラーライド、ファーストステップの 5 部門 (来年からカラーライド部門が無くなる) で、審査に当たる写真家が一次審査の段階から全ての作品を見ている。この他に「猫」、「鉄道」、「ヌード」、「絶景」などのテーマ毎のコンテストも実施。

2. 「アサヒカメラ」と写真の審査との関係は、アマチュア向けが月例の他に、企業タイアップ、全日本写真連盟、日本写真家協会、写真甲子園など。プロ向けは、木村伊兵衛賞 (1975 年創設で写真界の「芥川賞」と称されている) と企業タイアップによるコンテストなど。ということ (これ以外も含めて)、週に 1~2 回審査員として加わり、写真は飽きるほど見ている。3. 木村伊兵衛賞受賞作の変遷から見える事は、ドキュメンタリーやジャーナリズムを内包する作品、異境・辺境を記録する作品の時代 (第一回北井一夫「村」へ、第十五回星野道夫「Alaska」~90 年代) から、ガーリーフォト (梅

佳代や蛸川実花などの女の子写真、身の回りの何気ない光景をフィルムで撮影。90 年代後半~2000 年代) の時代を経て、現在は「個の時代」(第三十四回浅田正志「浅田家」、第三十九回森 栄喜「intimacy」へ突入。アマチュアの審査では「デジカメの進化」に伴う変化が起きている!

4. フィルム時代は、「好球必打」の姿勢が必要。高度な撮影技術 (夕暮れ、夜間、明け方、動物撮影など) 自身が重宝された。絶景写真を撮影する場所を探せる事も高い実力の証。「見たことのない景色」が評価された。

5. デジタル時代になって、「決定的瞬間」はカメラ任せ。高感度撮影性能 (ISO 40 万 9600! SONY α7S)、AF 性能の飛躍的向上。また、インターネットの普及で写真は「身近すぎる存在」になり、撮影場所の共有・特定が容易になった。即ち、カメラの操作という「技術」を競う時代が終焉し、「プラス α の写真展」が問われる時代に突入している。「見せる写真」から「魅せる写真」へ。

6. 今年のフォトキナ (2 年毎にドイツのケルンにて開催) では、Chimping (チンピング、液晶画面を覗き込んで撮影データを確認する事) にたいする疑問の声が出ている (液晶モニターを無くし、記録は RAW データのみ。感度・S.S.・絞り・Focus 以外のカメラ操作は不可のデジカメが登場 Leica M Edition60)。

7. どの様な写真が評価されているか、を知るために「全日本写真展」テーマは現代を撮る」と「日本の自然」写真コンテストの夫々優秀作品を紹介。撮影者自身の感動とは別に、見慣れない光景を撮る事が評価されている。また、絶景は身近にあることも分る。



8. 「魅せる写真」をどう作るのか? 「写真は撮る (take)」ものではなく、作る (make) もの」
-Leica Camera AG Andreas H. Kaufmann 社主

そこには表現者の意思が介在する。写実主義的な風景写真でさえも! 「みな自然の写真を撮りながら、自分探しをしているところがある」
-竹内敏信
「真の写真とは説明を必要とせず、言葉で語る事ができるものでもない」
-Ansel Adams
「写真は沢山見る」- 立木義浩
いいと思った作品の技法や構図を真似てみる。そして自分のモノにしてしまう。「21 世紀の絶景は」身近な所にもある。日常の中に非日常を見つめる眼。審査員と感情を共有出来る様に。

佐々木編集長が語られた言葉を何回も反芻して、長年写真を撮りながら気がつかないできたことを気がつかされ、ハッとさせられました。勉強会に出席した会員 (遠く大阪から中西さんも駆けつけてくれました!) からは、「今日の日は大変良かった!」と絶賛の声しきりでした。(川太 泰夫 記)



作品講習会報告 2014.10.18 <<<

午前中の講演に引き継ぎ、「アサヒカメラ」佐々木広人編集長による作品講習会が開催されました。参加者 19 名、作品提出者は 16 名、作品総数は 84 点でした。「写真界の断家」と称される佐々木広人先生のこの、講演が熱気を帯び、20 分間ほど予定時間を超過したため、午後 1 時 20 分から休憩を挟んで 4 時 20 分までの開催。午前中の講演内容が「コンテストで受賞する作品の傾向」がテーマでしたので、講習会も会員の各作品がこの傾向と合致するかというところに関心が集まったのではないのでしょうか。頂いたコメントの中から印象に残ったものを紹介します。

1. 写真にはその時代のものであること「同時代性」が求められる。
いくら良くできた作品でも、写っている風景が過去のものであったり、人物の髪型が古いとか、写っている「干支」がその時代から遠いものであれば、コンテストの対象にはならない。今を撮ることが必要。・・・無かったところに新た

に道ができ、火山が噴火し・・・風景も変わる。

2. 「赤と緑」リバーサルの優越性を積極的に活用するとよい。
プロの世界では、「まだデジカメカメラでは赤と緑をうまく出せない」と言われている。デジカメカメラの技術がまだまだ追いつかない中、カラーリバーサルで赤と緑を積極的に出して、優越感に浸って良いのでは・・・

3. 風景写真に「人間の営み」を写してよい。
・桜と建物の写る写真では、審査で意見が分かれる。屋根の配色を生かすか、建物を外すか。無理に人工物を除去しようとする、アングルが難しくなる場合がある。人工物は入れても良いと思う。
・電線を無理に避けることもない。
・コンクリートも年月が経つと風景に馴染んでくる。「同時代性」がおもしろく表現できる。
・(ダム)の石積と芝生、樹木を対比させた作品では)人間の営みと自然との共生をジャーナリストティックに考えたい。